

喜多川相説の画風形成に関する一試論

野口 剛（根津美術館）

喜多川相説は、かつて宗達が主宰した工房・俵屋を、宗達の子とも弟ともいわれる宗雪から継承したと考えられる画家である。ことに、宗達周辺で成立した、多く「伊年」という印を捺された草花図屏風、いわゆる「伊年印草花図」の歴史的展開にあつて、もっぱら草花を描き、やはりしばしば「伊年」印を用いながら、しかし初期の伊年印草花図や宗雪の作品とは一線を画す画風を打ち立てたことで知られている。紙の素地に、淡墨で地面や霞をあらわしつつ、適度な余白をとって自然らしく草花を配し、花には明度の高い彩色をほどこしながら、葉は墨と緑青、ときに藍などを複雑に用いて表現する。葉に多用される墨を基調とする、渋みのある、清廉かつ瀟洒な趣が、相説の作品の大きな特徴である。

相説画については、これまで、「伊年」などの小印を捺しただけのものから「相説」の署名を入れたもの、そして署名に「法橋」という官位を加えたものへ、あるいは、押絵貼屏風の小画面から六曲屏風の画面へ、といった指標によって、その展開が跡づけられてきた。また、後世の画家、なかんずく尾形光琳に影響を与えた可能性があるという、近世絵画史上重要な位置づけもなされている。しかし画風形成、ことにその水墨味の強い魅力的な画風がいかに導きだされたかという、相説画の根幹に関わると思われる部分についての議論はあまりなされていないようである。

本発表は、状態が良好でないため非公開を余儀なくされてきた一点の「草花図屏風」について、近年の修理によって展示が可能になったのを機に、あらためて美術史的な考察を行うとともに、この作品を起点に相説の画風に関して検討を加えるものである。本作品は紙本着色金泥引き、現状一隻の六曲屏風である。画中に「伊年」の朱文円印が捺されているが、署名は無い。発表ではまず、当該の作品が相説に関係するものであることを画風の概要から指摘する。ついで、この作品を含む相説系の屏風に頻用される、ある特定の「伊年」印に注目し、同印を捺される、これまで相説と関係づけられることのなかった、水墨に金泥をほどこした一群の小画面作品を抽出し、相説系の作品リストを拡充する。そしてその上で、当該作品の位置づけを試みる。具体的にはそれが、画面構成において早い時期の伊年印草花図の面影を備えること、言い換えれば相説系の草花図屏風のなかでも古様な側面を持つこと、一方で、総じて描写がナイーブで水墨のニュアンスも豊富、その水墨の働きもあってひとときわ高い自然らしさを表現の内に持つことなどから、相説画風の初期的様相を示すものである可能性を論じる。そして、その周辺にさまざまな水墨表現を示す一連の小画面作品が存在することをも鑑みて、相説の画風が、おそらくは初期の俵屋絵を含む水墨画への傾倒と、そうした水墨の表現性の草花図への適用によって形成されたのではないかとする試案を提示する。さらに以上をふまえ、工房制作の問題にも留意して、相説画の展開についても考察を及ぼしたい。